

風誹

奔多留三編

9  
1147  
35



門	へ	9
辨	1147	
卷	36	



今やあまの川乃  
 文日なむとてあまの川屋あはれの  
 西流又〜今此榊と松川を  
 ましあまもも川原〜あまの家の  
 三つあまの家の榊を折る榊乃  
 西風にりとはなむいさを風よ  
 あまの川とあまの川十面に

け道のみの事を歌いよめる  
三千七ツ流編は折の絶あり  
若くはとらふとて思勝を  
かえりこみちの妻り序の

### 文化四市の終

川柳風句合本例角力會

文日堂評

上ノ部

一 眼ぐる市家の曲りあはれ

極男の名不しく式部さき

尾士の裾川張るわさ之十玉

大きか内と建さからせぬい

休玉へと扇がどくきつのは

あつし車力無甲の中場へあ

英徳

賤丸

扇橋

英徳

丸鈴

波静

上ノ部

七分仙より川を流るる水  
目茶のゆきぎる橋山の楳  
根ちるをに葉の火が熱う  
日本の差と一板に滑いて  
夫十ありしの信 凡と少く立  
日にかつ 踏石のえくすり日  
不二山とむくくちいさく女  
張おぬる牡丹の巻とあすの

和里  
花夕  
一考  
谷水  
木賀  
青柳  
紅柳  
本賀

中ノ部

射とほし急がし一粟はち  
中々ちちく小ぬるとめぐる所  
かりろく柱とちちるは千  
空舟と急せふ来り二の何者  
奥方の志と急せふ来り二の何者  
らしてぬちんがくとしつ二  
杜若父の神を牡丹と  
しつ二の梅下と柳ちり

義徳  
九沙  
全  
和里  
花夕  
一考  
本賀  
集馬

中ノ部

少歌の依替イ初とのうほし  
葉好がいんはれく徳とけれ  
初之よそのえたる葉し  
又七文のよふとあぐはふなよの  
初門とよこ目であふいさるうえ  
白むくし思むくあつたれはく  
ど川ちらのあらしき良方に金  
千さび目の雪とりのあつら

一考  
谷水  
森島  
花夕  
柳子  
雀馬  
九沙  
本賀

同

初をのよ世にそのえざる柳枝  
務南カ衣敷いぎすのむがけり  
あがると片ふに神とあがり  
関はらる席とある様つらう  
舞のあひ楊心忠がのり上り  
あつたりの律法にむきむ村はき  
葉種をのよ果とほと堀と  
えんがとあるとほげ南がから

千之  
表鳥  
眉長  
馬地  
柳雨  
水吉  
本賀  
一考

前ノ部

つんぎんの掃除をえらと子依近	紀末
姉さんとまひをて癒き子つりうと	賤丸
急がし一集えんじん持とち力のま	肩長
肩すかゝるまの枝くまの猿と	燕子
似やとあまをかんがつる三合自	千之
芋賣の如産力年とまよいかく	豆人
くらねとれしつてむひの舌とあ	扇福
天乃くがさきとまひりく天ま	天作

同

菊をまがき年孝二味酒くらうく	谷水
お常さんお高さん一ツやんま	毒鳥
念仏ぶりりく吊ふ少を徒	吹唐
がらら口人とまきとらり屋と	豆人
鬼の子のぬんご一掃の草でも	吹唐
雷のふとまきとらりの脈で個ひ	露考
はなをながる鹿とらりの肉と悪埃	花又
まねでま各の御とまきとら	谷水

さて昔号の如きと芋とあるは  
 船がせまきしとらにを撰ふ  
 舟よりふらむむぞん徳利の布袋  
 すがきととらに深きるを物連  
 あなが森ごとけ猿か  
 鹿豆のかきく徳田長く  
 不ろとすましが森三をかきく  
 ちやむぐ下女まきり上

保良  
 一考  
 義徳  
 教売  
 秀  
 谷水  
 木賢  
 何雨

左邊が母馬の着てて乃あ  
 大あいの弘法さゆき多んをけ  
 すまきも女らん後になら  
 小作と流しをんおろし  
 指でくく志海とぬを村を  
 十目りのころをてかつ  
 月平で能い八条目と社以の坊  
 房州七やこお授くおとる

賤丸  
 松柳  
 互人  
 五徳  
 丸沙  
 出丸  
 谷水  
 燕子

以上

二會目

文日堂評

光陰の幕ひきぬくも川の霞  
 徳着れ来り彌子もくうらぶと  
 九年の海んで名をいひ八重きく  
 初知の日まど眠るを外新梅  
 糸本にまぐれ茶里の門くま  
 草茶の中り勸う怒大武禮  
 別つても柳出はく縁があり

琴我  
 森鳥  
 二蝶  
 花夕  
 二蝶  
 森鳥  
 二蝶  
 琴我

やさしーさハ義ありむと柳て出  
 市居り糸のはを坊をともら  
 徳本らたのく甲斐ある名匠之  
 肩ぎぬをかいどりまをりく日和  
 うらまをり握つりどくまうら  
 つまきはで三味せん坊の小鮎つ  
 替えたら子の志白くくま山名  
 松ら志のぐせ山吹らめくく  
 あら比の新造麻と旭のうら

花夕  
 賤貞  
 琴我  
 保良  
 賤丸  
 二蝶  
 花夕  
 全  
 都柳



夜子のあそびをうそかき身子乳をねる  
登んあんと妻のものがらあつた  
鞘の毛を静ころりぐをぞく  
とぞむ文小を帳の三番とく  
松の内附木のる雨で松山旅  
あつころる飛ぶり四輪車をきき  
手れの串ざり芋であつたとあ  
子がかけては内仕あふ除敷の獅子  
午房一も様をききてきき候ひ

賤丸  
亦楽  
琴糸  
森鳥  
和里  
吹唐  
和里  
丸龍  
金獅

今のあそびをうそかき身子乳をねる  
二日の夜模新まゝのあそびをう  
かあそびをうそかき身子乳をねる  
碓氷でもいゝあそびのある次への浦  
もあそびをうそかき身子乳をねる  
のあそびをうそかき身子乳をねる  
仙洞跡を湯好きごとと下女あひ  
くがきくるとあそびのあそびをう  
あそびをうそかき身子乳をねる

若蝶  
琴糸  
雨江  
吹唐  
自主  
花夕  
和里  
吹唐  
全

梅里も根をたれ流に引をられ  
 くれぬをとおきんく娘まうをうき  
 おちよとらねまんぢうに梅白之  
 花傍んが切なる名も〜うまを休  
 よ〜丁の谷よのつぬ〜ハませ芝居  
 ろいどつをうて大根があやな  
 袷炮の疵を〜と解て鼻〜ぬけ  
 まろろんと鯉のぶい今〜ぬ〜紙  
 沖意の〜る〜ぐまや〜く〜女つ〜

梅里  
 吹唐  
 亦楽  
 共家  
 都柳  
 喜文  
 敬亮  
 吹唐  
 花夕

小石川澤藏司稻荷額奉納句 三會目

文日堂評

初年の日かゞ子れ目がセウ以紀  
 二月月の老う照る〜沖津徳  
 三東を守護〜海交の沖勢之  
 武のふ〜ぬねか〜い〜沖津号  
 穢の男れ業を〜その候沖津号  
 一の字〜ら表表〜うれ沖津官  
 二月月の老う〜る〜山なり

香貞  
 玉章  
 牛賀  
 箕山  
 丸龍  
 春男  
 似佛



廿二年の春解りけのちかは  
 ニシ日ツハ年のあゆむしけ縁自  
 るをよとすてど修く事難解  
 切しごとく下葉秋葉も遠くまは  
 秋多のちとすこ年益となて  
 ちちをくもるもあがむくく  
 左極ごくをておその地物果  
 ちのち修も下位りく初の年  
 まよ口の上あがるの修る名句  
 二蝶  
 雨江  
 谷水  
 魚川  
 琴我  
 木賀  
 眉長  
 吹唐  
 丸龍

妻が足知春年うすに馬このり  
 中縁自ま初をどにかりごとく  
 ちちをくハ二八か初修りて二ちあり  
 形揚もるらも養自も武の内  
 更りよと成るそて百八玉のこ  
 形伝の名述より一葉つきまよこ  
 大石のちをて物事かうのよ  
 入るの修にちきくおりしりま  
 のどあうさおまよとかけて嫁の礼  
 琴我  
 青露  
 森鳥  
 若蝶  
 丸龍  
 吹唐  
 香貞  
 一秀  
 柳雨

浦嶋とそぐきとかんで年がり  
息子づれ九節師一社ありて  
すがらに首座の松風をあらう  
ゆせがひと時ふてまの猿さ  
宗師と仲たらの志ぬまをい  
つとかくみ物こつとまのさや  
かき解をあげて屋敷の松上げ  
出陽をらつ川鳴んとて虎はキ  
かんとんの空まこととを知らさう

和里 横好 琴か 春駒 有幸 万旭 柳雨 有幸 保良

新やどにありぬれ昔まはついと  
祇事堂二八のありはさ川ソの  
初年と知れぬ神ふしとたつと  
ぬらつ川ととち根ハ敵を逃ひ  
言とえぬにかさしいぢ  
中守をとおあつと時と名画と  
あひを多縁自のあらがましく  
韓信といふあやでらるざらうは  
大根とすまれの物なるまひる

羊洗 柳雨 梅里 賤丸 喜文 未楽 燕志 林鳥 和里

右國へ沙形でそがひ撫り火  
 稀書のおしと女狐をくつる  
 猫と強牛をくつて接らう  
 平新と六の足らぬぬび  
 けらちや川の世と三角にそそ  
 象母が若くそくのり世終村  
 おまやアがれ物くそでハまき教め  
 たるあひ放屁のむと下女おかく  
 ある路陰の欠々之陽とに

水守  
 一交  
 和里  
 舞子  
 志夕  
 木賀  
 賤丸  
 森馬  
 紀楽



神風くくちまをさるる柳哉  
 文音堂  
 孫川

文化四丁卯年二月初午  
 願主  
 木林為

右額面模寫  
 補助  
 牛賀  
 琴我  
 賤丸  
 千之  
 豆人

西野稻荷杜額奉納句 四會目

文日堂評

不拍もも非もたけくふ年をあり  
 坂を押し車力の出さる油の年  
 弓彦をもとと袖づくの丸木橋  
 柳あうとつ川さるすのなをかりと  
 つういのもむ傘の娘の子どや也を  
 咲屋賑かろく男とおあいどい  
 け世かろ羊穂くまでこのうき

九龍  
 一文  
 里地  
 琴家  
 全  
 身鳥  
 柳里

けしきるうら橋のおぐくり  
 琴川ぶくれぬおごと捨てある  
 唐人とまをう作てりしかりあぬ  
 矢のおくくると上ぐ弓のつるが景  
 三年の昔ニそよに思ふ飛くを  
 是らもやや響うがさく去り山  
 子を捨るサ敷とハアくぬあ丁所  
 王子の鹿の年尾おもえたる玉  
 首隠山あその分をもつとある

柳雨  
 木賀  
 柳雨  
 琴家  
 様松  
 里地  
 若蝶  
 九龍  
 魚躍

正さうなや川の紅葉うらめしく  
 実を食らたがうい秘事をさう  
 めづしい声啼てけきひんでけき  
 を能く西風にうらる秘しさ  
 むかひあうあうとまの面白さ  
 りださうとこのちやまきうらるる  
 切膚固平ゆがけいキ出され  
 杉尾の髪摸らう粉と喰ふを  
 とれん秘事を秘とぬれ秘事を

琴糸  
 菊旭  
 花夕  
 白主  
 巨人  
 花夕  
 弓成  
 露秀  
 賤丸

男の足んまきさうに角がをく  
 ぬんとくおにがたうて鬼をぬり  
 相の首うら極年を馬ゆ  
 二の年と眼務をとりまおん  
 川ごとの肩ですうしてひらね  
 砂名と面をいとうやとまうら  
 のうに毒をうておる玉二ッ

白浪  
 山手  
 柳雨  
 一蝶  
 都柳  
 全  
 谷水

文化四丁卯年二月廿二日

願主

琴我  
 賤丸  
 柳下



下谷稻荷額奉納句

五會目

文日堂評

雨三交風々六ふと沖徒宜  
 千之  
 氷の田の荊穂の箱を沖徒宜  
 都柵  
 春の夜の六千あもるる車展  
 千之  
 正重のかくぞとすづく正一位  
 扇柵  
 ちぬちと産んごとそ流りつちち  
 青柳  
 和分の浦さ川をうとと浪がす  
 扇柵  
 玉家元産をさの房すを  
 千之

二の年とらりよつるがぬぬさ  
 全  
 三貝をのりすしてさふハ初登山  
 全  
 八手極くみる神に後く小柳を  
 全  
 果て女の玉苗さるる田植  
 扇柵  
 小柳のさるるもりぐいまをさ  
 都柵  
 神おに初年さるる柳 腰  
 扇柵  
 不習も極むつら後ふぬきを紋  
 青柳  
 玉と建扇と口とをぬさるる  
 扇柵  
 松牙をさるるちの柳はるる  
 都柵

あいふせに日吉世と奉れり  
 虎の威しかりび雄く一歩まう  
 紫菀の冬かうて大根も松のむ  
 神々神指をまのまよ日市  
 申くまの味味どこの靴もど  
 だかんで雪とてあそぶあそけ者  
 一歩せまのこまていせふ雲の  
 小作が神を奉り化る紫の所  
 赤とりの羽で奉りぐんぐんいふ

於柳 扇橋 全 散壳 青柳 於柳 千之 扇橋 青柳

馬の尻ツを銀のむちいかまけ  
 松茸と喰く高良をどと吐き  
 さん玉が上くゆきまの角を獅子  
 湯でゆきこ尻の玉おどの下へ  
 女湯の湯着ゆきまをふらう  
 大勢の獲獲く下女針を女  
 かしりのりの化かどゆりゆり

於柳 全 全 散壳 全 扇橋 青柳

文化四十年二月廿七日 願主 青柳

下女一題

六會目

文日堂評

下女子が百人の首三ツと  
扱が笑ひい甲こも下女とさるい  
蜜菓子でちられは後め下女が赤  
赤首尾よく下女ハ五日のれを物  
うごんげを小麦のふと下女の  
下女が扱をみだれて今朝ハ赤首尾く  
下流く甲こも扱く下女とさるい

丸龍  
五  
散売  
喜文  
散売  
糸旭  
魚踊

下女が親あのをこで乳でめん扱お  
柳橋 下女流んで足て後とこまチ  
ゆらの戸をさるけは下女が扱く出ろ  
かつがれい下女らさせもが流がけ  
こまめ下女扱一題目とゆー扱  
若知年の鼻はくぐと下女がら  
うこしを織下女がさるを流とめて付  
毛扇も事下女とつらるまぐ  
玉のこまを引て下女ハ炎

牛賀  
志丸  
散売  
本賀  
扇橋  
谷水  
保良  
赤林鳥  
柳面

後深くあつんとくんとぬてく下女  
馬階でもるぐ下女の影下り  
花屋とまごつく下女と花がまゐる  
ぶづとく下女とお孫をよくとく  
おけいとく下女お孫をよくとく目見へ  
あめとく下女お孫をよくとく舌を吐  
のせとく下女お孫をよくとく  
田舎下女草にまごつく下女  
あめとく下女お孫をよくとく

琴糸  
森鳥  
山鳥  
谷水  
花蝶  
森鳥  
谷水  
草洗  
森鳥

うとくめとく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく  
お孫とく下女お孫をよくとく

木賀  
眉長  
丸丸  
森鳥  
志丸  
眉長  
谷水  
賤丸  
森鳥

と鹿があいで下女を字途こ  
くうねて下女をせうまアゆる  
つまじいしりり目ささる下女の後  
つまじい下女をすけりし尚だに  
機と織る下女をからゆり  
まこららあしひが鹿ハおし下女  
かすこれの下女をゆるで糸かくれ  
てゆが悴と下女を揺クこくえ  
内原と下女ハ紙とくでかぐまぬる

魚踊 一交 豆人 丸珍 燕子 琴か 豆人 柳雨 山鳥

大徳と下女やうけりる年つるを  
あつめどのなうけ下女はゆ入  
白人はうハそで下女むごきれ  
おゆり下女をゆくてもがく  
と下女のくきい下女のをせぬり  
居麻むのく下女をせく屋まじ  
いものうかろり物ごと下女ハゆれ  
うごつて下女を青でりし福がう  
下女をまほし又ゆれうはこりご

豆人 山鳥 白銀 琴か 一秀 於柳 魚川 吹磨 義徳

居ひ一題

七會目

文日堂評

居ひむらうあ子うちまがせん  
 居ひおほふぐ杖とるるひて  
 居ひはらで居ひのかりひ居ひ  
 居ひはらぐく椀う世く出居ひ  
 居ひはらけと居ひはらぐく居ひ  
 居ひはら大考やおれし人の子居ひ  
 居ひはらそひしそま年さと居ひしそま

一秀  
 琴我  
 志丸  
 梅里  
 豆人  
 丸龍  
 義徳

居ひはらる人のふふふふある居ひ  
 居ひはら後まどかまふ新の中に居ひ  
 居ひはら二儀吾もあぶくをさる居ひ  
 居ひはら居ひはらひこえんをさる居ひ  
 居ひはらあてのけいそを居ひしてある居ひ  
 居ひはらち志やの舞中かへし斗か密居ひ  
 居ひはら居ひはらそひとくあを居ひ  
 居ひはら居ひはら夏初このをさる居ひ  
 居ひはら居ひはら子の初ひ百去入の居ひ

茶旭  
 眉長  
 丸龍  
 木賀  
 森鳥  
 丸龍  
 金獅  
 二蝶  
 扇栴







半田稻荷社額奉納句

八會目

文日堂評

妻小田とちり米の中を乳  
 秋くれハ米のあまき程あけ  
 農民の糞とす出の小づち  
 田代の七時とせいの七米の及  
 米凡小のど那尺稲のみりのき  
 穠妻のあまきとさき田のまき  
 正重と高重にけくまがうがの

炎鳥  
 作成  
 千之  
 牛賀  
 敬亮  
 本賀  
 豆人

宝井の名句が兼や筆がゆる  
 半田あけり川 舟の一以て  
 七とくく存しかるごとく  
 乳之満の板につら者の差とる  
 めぐりあきと名不と捨る  
 目本の乳を極小名とあけ  
 大川へ早サと捨る  
 舟出の想と今更のれに作  
 神をてでる名の娘内とゆる

丸新  
 吹唐  
 於柳  
 賤丸  
 里地  
 花文  
 里地  
 丸新  
 谷水

櫻本と猿筆をよむと名を  
忍内と神田と富士の福屋  
地子くさの店と極くうら  
地下人のけるとくくく  
石の言ふ良茶と茶をよむ  
桶伏を今にうらまの道  
乳酪をよむうらまの道  
新造の心茶くく梅が  
秋の茶吾友をよむと

九珍  
千冬  
里北  
義徳  
一交  
吹唐  
一秀  
里北  
森鳥

うちをれば忠佐尾の尾が  
竹の葉をよむと二日  
ちのりの中をよむと  
中をよむの中をよむと  
あぢさいのむをよむと  
吾友小僧年の作で  
ある所を成布をよむと  
あれこれとよむと  
けろくぬ曲水をよむと

里北  
朝柳  
信成  
木賀  
二蝶  
柳子  
谷水  
木賀  
琴水

男のええとけいばるん坂  
あつてなまねく不害候を  
股川と御織がま田の所  
白狐と地改中縁れぬと  
床カエのきんをける  
何と種とて意方とバ  
大多し狸の穴へよと  
大新屋のたび竹箒を  
おぼく作む

花夕 賤丸 吹唐 一秀 豆人 一秀 全 義徳 本賀

おぼく作む  
安くつげ下女作る  
揚枝又世け  
素人芝居か  
小便を二階  
め  
陰陽の  
穉の穂と

此珍 全 一秀 賤丸 馬抱 朝柳 里地

文化四丁卯年三月晦日

願主

里地

九會目

文日堂評

弟子ありて源孫蒼海の恩を知り  
傍と申ふづらゝの汗をり  
どどむくちのりもさひをさらふ  
汗上りの鯉業の氷に作  
つものさへてふ傘をさひり私尚  
并天の此秘花をの思ふもく  
今終るるにちるとけの乳と毒

吞秘 残丸 魚川 谷水 和里 教売 一考

恩の門とましの園おしやとめぎ  
鯉魚が志がんで能い家の孝  
凡のよきとぎで梅の事と死て来  
ほのぐふおとくま川のちをぬり  
所地を地とありとそりる毒が母  
月宮殿乃正ちくく自云子あり  
仲の所様も牙とバリくぬお  
新下流のまきくいさく仲の所  
つとれても汲ぬといふが玉と紙

任成 橋東 花夕 丸流 琴家 甚愛 琴家 如慈 伝系

中の字やの松屋上より急がき  
月よりなぬあり急がき月がかり  
茂雲が描く嵐とそらぬあり  
ゆきともよみきるな文字ハ糖  
ほのあさけけニ夕月あくる  
おのろさん又おのろのそとを子と  
おのろのきとあつしとあつとあつ  
おのろいとあつおのろいとあつ  
谷のきいのを朝西帝理を帝

敬売  
員徳  
谷水  
琴糸  
和里  
紀系  
琴糸  
谷水  
琴糸

運めり柳を今に根がぬり  
あまきりて百方だんをぬらり  
まをこらまをこらまをこら  
山ハツ嶽して南く買ひより  
何れぬあつ胃にけりまばさ  
推利を流しぬぬぬの幾  
直のきぬぬぬぬぬぬぬぬ  
まをまをまをまを二階であつ  
まをまをまをまを二階であつ

吞族  
妙丸  
丸所  
里地  
紀系  
琴糸  
琴糸  
琴糸  
柳雨

浪の妻もし守ぞ 後むる念仏  
女房の仇ぶそましくしていく田流  
瓶もがく 後殖で鬼の角が裂  
おぢまのあまねくまゝ下階の子  
くつ勢に出るなまをよとれてあやし  
そあるのぬえを引てする口車  
入折らどり遠ひまゝと下女おま  
おまごの里と雑屋ごとと下女おひ  
まゝこそ 妻系に写すのはがけ

二蝶  
子地  
吹唐  
二蝶  
初丸  
猿山  
豆人  
二蝶  
於柿

まん儀るあつて 流る小ぬり  
翁あつ十八あつ 後ふちり  
あつまでさうい さがうりいさく  
妻あつの新也よとそに珠まれの  
まゝく 孫そまの儀とまゝいよも  
うごんげのうまら似城のふ洞法  
女あつら 折ら 押し車 ぬ  
おまが女とあつと三浦のまゝい  
雷が鳴るをさうい 夏を喰ひ

丸入  
妻系  
一考  
喪馬  
吹唐  
柿系  
本賀  
丸珍  
夏人

茶をいし内装炮けの口をさう  
 けらる意気はさくさくを遠く  
 玉のまきようけ柳かかあまの  
 千面うでかりしをかけと乾ぐら  
 三層のちり茶をとお玉で雲の  
 中のさくちをさくぬ腹りを  
 とうとうとさうで扱中にぬきぬ  
 初出りと数かぬれてぬきぬ  
 三と坊まじと地ををさつる

三星  
 花文  
 松竹  
 後丸  
 一考  
 吹磨  
 里地  
 二蝶  
 一考

十會目

文日堂評

おけしのいこれと寝る扇と焼  
 切と焼しを筆しいぬ中焚と  
 土のまきと天まきもけ茶の片  
 舞のらささ去乃座追茶が出来  
 おけりさくく裡と流るがやま  
 蛇が物さくさくを尻にとりて迹  
 吹ひさく柳焼くさくさくさく

里地  
 竹子  
 豆人  
 里地  
 花入  
 都柳  
 一考

明日同のとも子だが十日目をとらう  
 板月のすまわりく今こそ初光  
 をひく一歩も歩ひて其茶器  
 肩をたたくぬる地もさきや  
 一十油のまてテものりの縁を引  
 田のちがはくまをさそで名が  
 安未の種と符くも秋づらひ  
 一歩も歩くと新さひほくさ  
 ち一切を難波も修替もほどき  
 花夕 為人 教売 里地 柳五 兼旭 教売 水子 為人

越る今こそ名をあらわし  
 出ぬらんかきさねのあつと男  
 蜀王ももろくあつてと名が  
 めやうらうと新と清極の福で  
 沖津系のの初らやまの川ちや  
 やうなひの世房とまて初く  
 物も香と穀垣根のと盤あり  
 のうやうといはれど是代を  
 今産人ごるにちとつ名も川  
 花夕 里地 谷水 牛賀 斗丸 本誓 谷水 琴系女 谷水





志丸  
 扇橋  
 琴糸  
 蝶  
 森島  
 一考  
 貞徳  
 斗丸  
 全

志丸  
 扇橋  
 琴糸  
 蝶  
 森島  
 一考  
 貞徳  
 斗丸  
 全

生娘とて捲く森くして正小刻り  
 吹唐の志ざんは後るを念  
 指をわして吹は根ぬと根根之  
 をいひてさうえさう根を家  
 森とびぬくやあんでして正  
 法いづらひ根森十七日月  
 おろろい口とて物とれど舌く  
 腎産のやういひ今いひまぬ  
 角文字でいふもさうさうが

夏  
 吹唐  
 根丸  
 蓮子  
 斗丸  
 柳舟  
 花夕  
 柳舟  
 二蝶

大塚波切不動尊額奉納句

文日堂評

志し殿にあたりくまぬ津姿  
 歌の波を利被て切り治め  
 人さすかハち号新乃指結く  
 のとやうさ断く波へ押さし  
 ちかからハたきか塚の目貫く  
 そのちと神祇のめいぬおさき  
 戸がわいて是れは屋敷の神玉

春駒  
 紀樂  
 森鳥  
 春駒  
 義徳  
 丸龍  
 一文

三社と院室三社とあるづり  
 おらうが南戸帳波を弁  
 如菩薩とあらふあらの印利を  
 折軒の印堂之印く乳不と  
 中月番かろお細工あそとま  
 秀の謎とけく印着とを揚る  
 この房と舟と美とのるたあり  
 弟来になしひ心の教る勝角力  
 嶋老の向た略が一羽くく  
 九龍  
 眉長  
 横好  
 眉長  
 春駒  
 二蝶  
 孤雲  
 一交  
 煎長

ち由秋と伊勢うとまを  
 多の目とととと世この宝之  
 中のうさ娘あしくとまごんぞ  
 當今うら娘仙洞と母のく  
 夜音で徐福えんげして宅  
 東南の風と外新の番とあに  
 空に志とまと雪の降るさひと  
 かぶんで竹の子をひく孝女と  
 方荒に名とあそとねて下女八迹  
 二蝶  
 谷水  
 雨江  
 其流  
 琴我  
 勇賀  
 一交  
 雨夕  
 梅鳥

和里が鳴く日女の振がゆる  
 若蝶を世所目麗とよき  
 出さずて送るすくも柳之  
 明王のうらりたまらささり  
 柳雨を袖とくもつらさがり  
 歌杖を肩より所名とゆき  
 不二山へ大をあらはせしむ  
 祖師の日へ一と加て二と  
 世所と友信て敏大に  
 花夕 全 吹唐 賤丸 柳雨 喜文 若蝶 和里

かけぬく門へ雲を運つゆり  
 ぬちとさひさりに志を檀押す  
 二日ふる松の佐れ海が知れ  
 空をきかぬが園へも旅と世所出  
 和人のいへん切り世とをこと切  
 仏の門ををまらるる世と  
 心もやに念月を身も子ころ  
 えせむらさきぶる歌にあらは  
 かしめ身らぬくも病ごとく  
 轉寢 友交 米虫 悟遠 玉章 扇橋 花夕 森鳥 夢中

孝行さあむ百の内と取て  
お糸合さアおさねくは出さ  
勇者の琴をそと味みるま方  
目の玉れ時中ぞんよお咽で鳴り  
お根くあちこのぬとそるに  
あんどんで啼ばるでハあつら  
こじれどやちらん梅とぬまは  
かこつ川つき方々をの巴をの  
あもむに二階をぬとたむらさ

文俄 保良 森鳥 都柳 賤丸 雨江 吹唐 九龍 琴我

ちかこの口にむら子あつた  
くこ入し一さふお時多  
陰陽のぬこの川と泉ぬけ  
村のがう志やよと板あゆのう  
おいんくあつてえんがう志あれあ  
くいつこの海をにあつた川れ  
大晦日ぬらん人の尾を笑ひ  
あとのけにあつて今と指さ  
つけやひうあつとまがうあつてぬ

焚雀 平壺 水守 和里 マイタ 轉寝 梅里 喜丈 風鳥

きせんちり裸のあぶりと佐徳を  
 後のいり沸るたことおけてわろ  
 おぶさると思やみさる何くまろ  
 松茸とさうさた極く子ら出あ  
 くらく人の山伏さういぬりてあ  
 御祭のらあ中一坊が目とそんし  
 さん玉とけういひと女人堂そん  
 ちんちの福とあむくの門とちん  
 萬物の靈一物のあで出来  
 枝成 有華 一秀 都柵 風鳥 二蝶 林鳥 賤丸 馬遊

軸

宝島や丸くし勃うん  
 文日堂  
 孫川

文化三寶奉土月廿二日  
 願主 米虫

補助  
 牛賀 千之 豆人

小川半天軒

小石川牛天神額奉納句

文日堂評

志重家柄のむらえも津ざら  
 三すい山風ふ向や乃ま遠う  
 老匠れ伝名と東世のふゆゆ  
 せん多くが産く山所の家とが  
 山むらうの牛美代の古伝う  
 法合をむ家やうまんそ人う  
 席まきさうち虫と連く事  
 桃林  
 谷水  
 森鳥  
 六川  
 牛賀  
 和里  
 豆人

かいんを流くぬのの流る  
 秋のく穂と園子んうらうら  
 ハケ女乃らぬの柳ふとがら堂  
 舞のたふと拍とそいゆり  
 柳舟くこらんどううを判と押  
 か供く家成ぬぐ出の者う  
 青のりや秋伝を麻うう上  
 ちおろし等の隠れを流く上  
 師匠うぬうらうやのまが上  
 花夕  
 素菴  
 燕子  
 松会  
 吹磨  
 和泉  
 雨江  
 柳里  
 魚川



神宗天皇御宇のころに目があび  
 ちよとくことあはれを天の乳の味と  
 世に伝はるるの味といひ傳習の爲  
 不蔵のよふくまげ秘授て金十  
 三万と云ふ人ぶをさすりもかご  
 牛の汁ををまじひのりともりい  
 左宰相をとり女御入と思つて  
 水に付かぬとの給ふも深まき  
 後からまじれこころにあらむと  
 青車  
 弄弄  
 死入  
 一文  
 平毒  
 牛尾  
 二蝶  
 筆お  
 八化

魚の首をいふ所のゆるき味のを  
 だんりてし本所のやまア怒が信し  
 軸  
 水守  
 桂花

南文子や新波の及し  
 文日堂  
 孫川

文化三五年十月廿五日  
 願主  
 豆人  
 喪馬  
 牛賀  
 一文  
 補助

小石川諏訪大明神額奉納句

文日堂評

神徳度ら月と名に記国の内  
 三三九と云々かきくさる中塚日  
 湯毛に敷のひぬトモの流筋  
 ちの川とてなるが産湯と云ホ  
 雲とあり天窓を柱一肩車  
 流筋の橋ありと云々とむが嘆  
 龍の凱秘多しと云るを川橋

像而後楯をそくかつぎぬを  
 足為の沖祈禱文を今ぞある  
 奈天が布袋と云ふゆりじうさ  
 大いなる脚を力甲午七流く  
 まさりの時とせんこめり出る  
 車坂ゆるりをまれば少くこけ  
 け多と云月より流ぶと云く後  
 妙子様と云ふに妙玉の母帝之  
 十二首娘と云ふと云ふか多と云

義徳  
 魚川  
 賤丸  
 琴糸  
 燕子  
 谷水  
 流糸

和里  
 森鳥  
 管先  
 花又  
 一文  
 水子  
 赤土  
 赤竜  
 云女

田舎とぬき庵とよとよとよ  
 虫のふどの木でもしつるぎ年  
 赤坂も口ッ若そ揚るまの風  
 づんくとのひまづ姉か糸を引  
 くらぶられあつてお果を福がら  
 とれとこがらんざと風抱起  
 星夜とる所のちまといどる  
 平塚雲をまろく賣あけ斗嵐  
 六川  
 牛賀  
 林鳥  
 松会  
 泥糸  
 清静  
 桃林  
 天作  
 青水

似城とえとせぶくく女房ま  
 以きて事と大根もゆきま  
 号も隣りうたの根の枝  
 重宿もむくくを娘のゆき  
 月くに月又る月をト女葉  
 考あんで鳴るあー誰で隠  
 ちあがひいーまことト女ハ  
 をのめび獨り角カをまろ  
 解りし流る流湯和合  
 松原  
 桂新  
 栞里  
 川成  
 吹唐  
 平壺  
 豆人  
 蝶

軸

御覽及了之旨の由

永承欽

文皇

孫川

文化二五年十二月廿七日

願主

六川  
豆人

右三評額面模写

補助

天作  
喜文

○俳諧風書品目錄

江都上野  
山王天竺

花屋萬次郎

俳風柳栲栺遺十冊

川柳点与相付代名  
墨子惠頼の筆蹟作

同川傍柳

在川柳点  
同やしの意

同折白程首之遺稿篇

江戸五文堂抄白類是者  
編纂点  
点与首等角の抄物著

同筆草

江文子抄の意  
小倉宮は事の川の年

同筆草

江文子抄の意  
小倉宮は事の川の年

俳諧

...

...

